

保育・教育の価値とリスク 感染症流行と、変わる社会のもとで

「そろそろ夏の活動も考えなきゃ。今年はプール、どうしよう……」。昨夏は新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」と略）で中止した園も少なくなかったようです。更衣室があるわけでもない未就学児施設で、なぜコロナを理由にプールを中止するのか、私には解せませんでした^{*1}、それはそれとして。

私は、さいたま市のプール水死事故（2017年）以降、「監視がおらずに子どもが水死した場合、園が負う社会的責任のリスクはとてつもない。プールはやめて、水遊びや泥遊びに切り替えては？」とお伝えしてきました^{*2}。監視していても見えない時は見えない、気づかない時は気づかないのが、水の怖さですから。

それもそれとして……今回は「リスクについて議論ができなくなる、感情の話」です。

感情が、リスクの判断と対応を誤らせる

5

掛札逸美

KAKEFUDA Isumi

心理学博士

保育の安全研究・教育センター

心理学博士（健康／社会心理学。専門は安全とコミュニケーションの心理学）。1964年生まれ。筑波大学卒。健康診断団体広報室に10年以上勤務後、2003年、コロラド州立大学大学院に留学、2008年、博士号取得。産業技術総合研究所特別研究員を経て、2013年、NPO法人保育の安全研究・教育センター設立（2020年に任意団体化）。厚生労働省「平成27年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員の他、死亡事故の検証委員等も務める。

リスクに関する議論を止める、すり替え

「大きな社会的責任はとりきれないとお思いでしたら、プールはやめましょう」、「そう言うところ、そんなことを言われたら、何もできなくなる」「危険なこととは何もするなということか」とおっしゃる方がいらつしゃいます。研修会で怒鳴られたことも過去数回。

ミニトマトや白玉の話をする時、「そんなことを言ったら、何も食べさせられなくなる」とおっしゃる方もいます。「頭部外傷や転落後には受診を！」と言っていると、「心配ばかりしていたら、保育なんてできない」とも。

「何もできなくなる」「何も食べさせられない」？ いいえ、私はプールだけ、丸のままの

ミニトマトだけ、白玉だけ、節分の豆だけのことを言っているのですが…。頭を打つと言っているのではなく、「心配ならすぐに病院へ」とだけ言っているのですが…。

この種の言い回しは、一を百にあてはめて一を否定しようとする論理のすり替えです。似たようなすり替えには、「〇〇をさせてあげなかったら、子どもがかわいそう」もあります。まるで、〇〇が子どもの一生に影響するかのよう。そしてそもそも「かわいそう」は、本来の論拠となるべき成長発達の科学ではなく、話者の感情に基づく仮説です。

このようなすり替えばかりをしていると、いつまでたつても個別の「一」（この場合は深刻事故のリスク）について具体的な議論ができません。混ぜ返すスキルばかりが身につくについて、議論のスキルも身につかないでしょう。

死んだ子どもたちは「大丈夫」と言えない

深刻なリスクをめぐって「〇〇させてあげないと、子どもがかわいそう」と言う場合、もうひとつのすり替えが起きています。深刻な結果が出た時こそ子どもがかわいそうだという、重要な想定を無視しているのです。

「あおむけだと寝ないからかわいそう」「ひっくり返すと起きてしまつてかわいそう」「プール遊びができないとかわいそう」「(外気温が30

度以上でも)外遊びをさせてあげなかったらかわいそう」。でも、死んでしまったら、かわいそうなのは誰？

もうひとつ、こうしたすり替えの論拠であるかのようにして言われるのは、「私が子どもの頃は：(川でも遊んだし、プールも毎日していた。ミニトマトもアメも食べた。暑くても外で遊んでいた)」。ここでは「大丈夫」と言えるのは、生き残った人たちだけ。死んでしまった人は何も言えない」という事実が無視されています。今、「大丈夫」と言えるのは、あくまでも私たちがまだ生きていますからです。

「自分は(自園は)今まで大丈夫だったのだから、これからも大丈夫」はありえませんが。宝くじに当たった時、「自分が必死に努力したからだ」と言う人はいないでしょう。宝くじは運(確率)だから。事故も同じく確率(運)が大きく作用するできごとであり、深刻なハザード(危なさ^{*3})を放置すれば、いずれ深刻な結果が起こります。災害リスクも同じです。

感情の罠にとらわれない練習を

人間は論理以前に感情の生き物ですから、まず感情で反応します(「女性⇨感情的」「男性⇨論理的」ではない)。それは当然ですが、感情的反応のまま、リスクを無視する方向に向かったのでは、子どもの命だけでなく、先生たちの

心と人生もつぶしかねません。「自分は今、感情の罠にかかっているかも」と意識できることが、第一歩です。

そう考えてみると…、感情に働きかけるすり替えに園が足をとられない、という点も見逃すべきではないでしょう。今であれば、コロナ対策に便乗する不安商法です。「とにかく予防せねば!」「感染が起きたら保護者に怒られる!」…あなたのその感情が思うツボ。

たとえば、「〇〇はコロナを99・9%予防(除菌)！」、99・9%や99%という数字をよく見ます。なぜこの数? 冷静に考えればおわかりの通り、「効果がないと言われた時の逃げ道」です。本当に効果を調べていけば、99%とは書かないはず。でも、不安な心は、「99%! すぐ効くんぞ!」と感じてしまうわけです。

そこで、究極の混ぜ返しをご紹介します。「〇〇はコロナに効果があります」と言われたら、ニッコリと「ノーベル賞ものですね! 世界でどれくらい売れているか教えてください!」。本当に効果があるなら、地味に営業などしている場合ではないでしょうから。

*1 厚労省「新型コロナウイルス感染症対策に関する保育所等に関するQ&A(第九報)」(令和3年3月29日付)

*2 「保育の安全」(検索) サイト↓「安全のトピックス」 ↓「4 水の安全」

*3 リスクとハザードの違いは、拙著「子どもの「命」の守り方」(エイデル研究所) 参照。